



大川端带状近隣公園(秋田市新屋)

車の走行にも苦勞させられた雪が消え、桜の開花予報も発表されるようになった。秋田市は、四月八日だという。いつもの年より春の到来を、待ちがれているのだ。

昨年の桜が満開になった頃に、見事な青空に恵まれたので撮影に出かけてみた。大森山の展望台に上り、真っ白な太平山と街並みを眺めてから新屋の町に降りていった。川沿いの桜を見ようと、「あらかやさくら公園」(大川端带状近隣公園)に寄った。この堅苦しい正式名称は、大川で異臭を放つ製紙工場の排水路を、親水公園に生まれ変らせたことに由来するらしい。

七号線の秋田南バイパスが開通するまでは、秋

田大橋を渡って新屋の市街地を走り抜け南下したが、高度経済成長期の時代は、大川に近い西中学校にさしかかると、異臭が漂ってきたという。新屋駅の東側にあった製紙工場の排水を浄化しないで、雄物川へ流していたのだ。昭和三十年代から四十年代にかけての高度経済成長期に、公害問題は深刻化して「水俣病」や「四日市ぜんそく」などを発生したが、秋田にも大量生産、大量消費の影のような現実があったのだ。

歴史を想いながら桜を眺めていると、異臭を放つ川をこのような環境に生まれ変らせた人たちに、感謝の気持ち湧いてくる。長さが一キロという岸辺に、戦争前に植えられた桜が四百本もあると

いう。下枝払い作業など、桜並木の保護活動も積極的に行われているようだ。同じ秋田市に住んでいても、この公園が出来上がるまでの経緯と桜守りの活動は知らずにいた。

新屋には懐かしい昭和の街並みと、時代を郷愁させる建物がある。名水を活用して酒、味噌、醤油などをつくる醸造所が残っていて、独特な落ち着いた雰囲気が残っている。ここに生まれ育った人には、地元愛が強く社会貢献意識の高さを感じる。もしかしたら、大川端带状近隣公園の生まれた歴史を、語り継ぐ習性があるかもしれない。半世紀前の公害問題を克服して、「あらかやさくら公園」の愛称で親しまれる春の景色があった。